ハンノキマガリガの幼虫と巣

西村　登

近所の方が可携巣を持つイモ虫状の小昆虫を持参されたので，自宅で５日間飼育してみた．その行動から鱗翅目の幼虫ではないかと見当をつけていたところ，ハンノキマガリガ Incurvaria alniella （マガリガ科）であることが判明した．本種の幼虫を観察する機会はそれほど多くないらしい（後出，井上氏）ので，簡単に報告しておく．

採集地：兵庫県養父郡関宮町相地，西村俊鋪氏自宅裏の路地（コンクリート面）
採集日：1987年６月25日
採集者：西村俊鋪
採集数：幼虫と可携巣（ケース）各１

巣の形と幼虫の行動：幼虫は，植物片と推定される薄片を上下２枚接合し，２枚貝のようなポータブルケースをつくり，その中に入っている．ケースの形は，図１に示すように背面から見ると楕円形に近い．黒褐色で中央部はややふくらんでいる．大きさは，長さ15㎜，幅７㎜，厚さ３㎜程度である．

幼虫は，ケースの中から頭と肢を出し，ケースを引きずりながら前進する．頭部と胸部は黒褐色でキチン化しており光沢があるが，腹部は淡黄白色で膜質である．幼虫のからだをつつくと，頭をケースの中へひっこめる．この行動は，可携巣をもつトビケラ類の行動とよく似ている．

幼虫をケースごとシャーレに入れ，試みにキャベツの葉片を与えてみたところ，葉片の縁を少しずつかじっていたが，飼育開始５日後には弱ってきて，あまり動かなくなったので，小びんに入れアルコールで固定した．

固定直後，幼虫のからだの各部を測定してみたところ，体長９㎜，頭長0.4㎜，胸部長２㎜，腹部長約７㎜であった（終齢に近いと思われる（一色，1959））．

幼虫を同定してくださった井上弘氏（京大・農・昆虫），並びに標本を拙宅から井上氏のもとへ運び同定についてご高配くださった日下部有信氏（大谷大），生きた幼虫を見つけ，わざわざ届けてくださった西村俊鋪氏らに深謝申し上げる．

（付記）私が長年つきあっているトビケラ類は，系統的にはガ類と共通の祖先をもつとされており，中世代の三畳紀（約２億年前）頃，分化したらしい．そして，現存の鱗翅類のうち，コバネガ科（マガリガ科と近縁）がトビケラ類への連鎖型と推定されている（桑山，1972）．

前記ハンノキマガリガの幼虫は，陸生ではあるが，可携巣の形といい，幼虫の行動といい，水生のトビケラ類（とくにコバントビケラ）のそれとよく似ていて，大変興味深く思った．

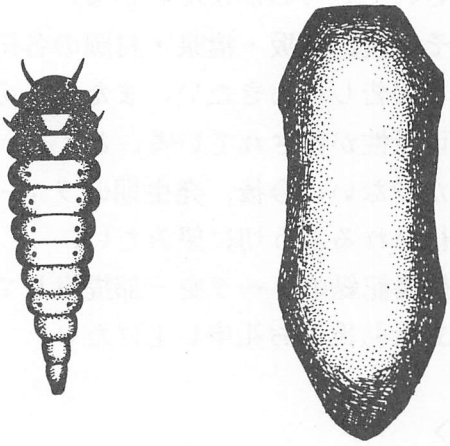

図１．幼虫と可携巣
（いずれも背面）

参考文献

一色周知（1959）鱗翅目．河田黨ほか「日本幼虫図鑑」：163-175．北隆館．

桑山　覚（1972）トビケラ類．内田亨監修「動物系統分類学」７（下ｃ）：33-51．中山書店．